

教団新報

定価 1部140円(本体133円+共200円)
予約購読料 1年分 千共 5,000円
紙代のみ 3,500円
振替 00140-9-145275
本紙を購読ご希望の方は、前金を
そえて、お近くのキリスト教書店
へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内 電話
03(3202)0546
FAX03(3207)3918
発行人 内藤留幸
編集主筆 竹澤知代志



アンマンからペトラへは4時間半のバスの旅

夏、世界各地から集った青年たち

EMS 青年ワークショップに参加し

中東の地で共に考え、感じ、祈つ

中東の地ーヨルダンで

二〇〇七年八月、アンマンにて、青年のためのワークショップが開かれた。ドイツ、南西、ガーナ、南アフリカ、トーゴ、インドネシア、レバノン、韓国、日本の教会から送り出された青年、二〇名が参加した。オリフ、なつめやしの実るアラブの地に、十八歳の大学生、二七歳の社会人、三〇歳の牧師、三二歳のファーマー……と、さまざまな青年が集った。極東の日本からは、二名が参加した。平和構築にむけたワークショップは、南西ドイツ宣教会(略称、EMS)によって進められているプロジェクトであり、これまでにガーナ、南アフリカで開か

れている。

EMSは、一九七二年、南西ドイツの州教会によって設立され、ドイツにおける世界宣教と州教会をつなぐ働きをしている。州教会宣教協会、アジア・アフリカの十七のパートナー教会で構成され、日本基督教団もパートナーとして世界宣教の歩みを強くしている。三回目を迎えた二〇〇七年のワークショップは、中東のヨルダンで開催された。このヨルダンの首都、アンマンで開催する理由のひととして、Theodor Schneller Schoolが挙げられる。この学校は、一九五九年、孤児や厳しい生活環境にあった子どもたちのための学校として、EMSの宣教会、シリア孤児施設福祉事業団によって創設された。

ここでは、宗教、文化、国籍……などの違いを超え、全人的な教育が実践されている。現在、六歳から二〇歳までの男子、三〇〇名が生きて育ち、生かす力を育み、未来にむかって歩いている。子どもたちの確かな未来にむけた教育は、EMS、その他の組織(例、EVS)、ドイツの諸教会の支援によって実現されている。学校の隣には、パレスチナ難民キャンプが広がり、長きにわたる中東紛争の歴史を物語っている。広大なキャンプ地を取り囲む長い

壁は、何を表しているのだろうか。

平和をともに考え、感じ合い、祈る

私たちは、学校のドミトリに滞在し、明るく、素朴な子どもたちと触れ合いながら、平和について、ともに考え、感じ合い、語り合った。一日の始まりに、終わりに、私たちは祈りを合せた。ある時は、英語で、またある時は、母語で。そして、そこにはいつも讃美の歌があった。歌はいつも心の中に流れ、誰かが歌い始めると、一人また一人とその響きに重なった。青空の下で、夜風の中で、砂

アンマンーペトラ

死海へ

ワークショップ八日目、学校を離れ、ヨルダン南部へ赴いた。

世界遺産のペトラを歩き、赤い砂漠のワディ・ラムを走った。そして、ヨルダン川が流れ入る死海に浮いた。アンマンからペトラへは、四時間半のバスの旅だった。

炎天下、命の水を携えて遺跡を巡った。あの迫力と美しさは忘れられない。翌日、ジープで砂漠を走り抜けた。ワディ・ラムの鮮やかな砂の色が胸に焼きついてる。バスはヨルダン南端から北へ向かった。二つ

の上で、讃美の群れは、祈りを謳った。神さまの恵みに与る歓びに満ちながら……。ともに謳った讃美の歌は、今も私の中で鳴りやむことはなく、鐘の音のように柔らかに響いている。

平和にむけたワークショップのテーマは、キリストにある生き、生かされる青年が、非暴力によって紛争を解決し、平和を建設していく方法を体得することであった。そして、教会やEMSの群れとともに、平和の主イエス・キリストの示す道を進むことであつた。

十四日間のワークショップでは、①異文化を体験する、②紛争の構造を知る、③身近な紛争の解決方法を探る、④平和にむけた青年たちの働きを考える、の四つの体験的なプログラムが

のチェックポイントを通して、死海に到着した。夕焼け前の塩の湖に浮いた。黄金色に輝くさななみも、強烈な塩味も鮮明に記憶に残っている。

神さまは、天と地を創造され、私たちを創造された。感謝の祈りとともに、一泊二日の旅は終わった。

平和へ続く道、和解の道

紛争は、なぜ起きるのだろうか。なぜ繰り返されるのだろうか。どうしたら、鎮められるのだろうか。絶つことができるのだろうか。

私たちは、自身に迫る紛争を見つめた。人間の怒り



南アフリカのボンギさんを挟んで、左が小倉沙央里さん、右が筆者

の群れだった。たくさんの違いがあった。窮屈に思えることもあった。そのたびに、私たちは話し合い、解決を目指した。違いに耐え互いにゆるしあい、相手を受け容れ、自分を受け容れ、もう一歩、平和と平

と憎しみばかりだった。怒りは武力に変わり、憎しみは復讐となっていた。私たちは、主が示される平和と平安へ続く道を探った。互いに和解の道を探し合っ

イスラム暦のヨルダンでは、金曜日と土曜日に休み、日曜日は働く。しかし、教会は日曜日に礼拝を守り、



映画で知る光景を目の当たりに

人々は教会で祈る歓びに満ちていた。私たちは町の教会に招かれ、礼拝する群れに加えられた。ともに祈り、讃美し、聖餐に与った。神さまにつながる歓びを強くした。そして、ワークショップでの体験が、祈りと御言葉によって、より真実となっていくことを覚えた。

主の導きと篤き祈りによって、信仰に生きる友と出会い、豊かな交わりと新たなつながりに恵まれた。心から感謝する。

愛会は、日本からドバイ、そしてアンマンへの道のりを強く支えてくださった。深い感謝をもって、ここに報告する。

(馬杉翠報)

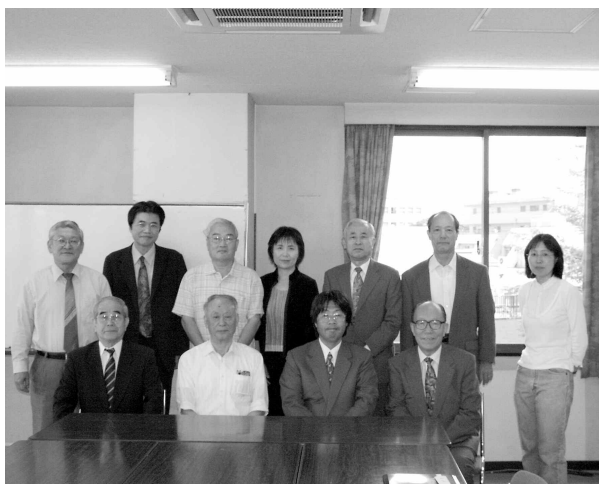
五反田教員

▼「空気がなくなる」という噂が広まった。ハレー彗星が地球に最接近、通り過ぎるまでの五分間のことらしい。息を止める練習をする者が現れた。空気を貯められる自転車のチューブが高騰する。貧しい村の小学生で、チューブを手に入れることの出来た生徒はななく、当日、地主の子もだが、何本も肩に担いで登校する。▼四〇年程前に、児童文学専門誌で、短編『空気がなくなる日』を読んだ。映画化も、絵本になったことも、最近まで知らなかった。図書館で一度読んだきり、原作も絵本も今は絶版。不正確な引用はご容赦を。▼大胆なSF的発想を持ちながら、極めてリアルなこの作品は、もっと高い評価を得ても良かったと思う。格差社会が言われる今日、発表時以上に現実味を帯びている。光、水、空気さえも、お金がなければ手に入らない時代になった。飢える前に窒息する。▼昔の牧師家庭には貧しくとも夢があり、教育があった。しかし、今や教育も夢も、希望さえも有料化した。より深刻なのは、霊の枯渇か。何に貯めようか。

08 年度厳しい予算編成となる

第3回予算決算委員会

第35総会期第三回予算決算委員会、九月二四～二五日開かれ、教団二〇〇八年度予算案編成を中心に協議がなされた。



委員一丸となって難題に取り組む

は、他に二〇〇八年度教区の負担金算定、全国財務委員長会議の開催であった。

定し、現行計算方式により賦課額案が策定された。教区によって現行陪餐委員の減少数が異なることから、減少割合の少ない教区では、逆に増額となることも見られた。

負担金は〇四年度から年度一〇減を四年間続け、総額で一、一〇〇万円の減額を行ったことになる。従って〇八年度負担金を一〇減の二億六、九八〇万円と設

は、負担金収入一〇減を基にした経常会計の収支総額が二億八、一九〇万円、収益事業会計のそれが二、九七八万円の予算編成となった。

〇八年度予算案について、端緒ともなっており、更なる検討が期待される。教団本部事務局会計は、負担金収入のみによる運営方針を貫くために、圧縮に圧縮を重ねており、限界に近い状況であることが指摘されている。全国財務委員長会議は、同日午後四時三〇分から行われ、沖縄教区を含む全教区が出席した。予算決算委員会が導入を勧めているPCA会計ソフトの実例を粉谷勝巳委員が紹介した。会議後に行われた予算決算委員会の評価会において、会議に出されていた要請を受けて、「諸教区・諸教会の財務等の状況分析」を予決の追加プロジェクトとして設定することとした。

〇〇六年度社会委員会関係献金報告」を全国発送した件、⑧第二回日本基督教団と在日大韓基督教会との宣教協議会報告等である。協議事項では、今期の「全国社会委員長会議」を来年六月十六日～十七日に東京にて開催し、テーマは今日的に社会問題化している家庭崩壊やDV、虐待等に絞っていき、講師との交渉に入るとした。別件では、長期療養中の教師へクリスマスプレゼントを届ける為の「長期療養教師調査」依頼と無認可で法人格を持たない開拓的社会事業へ援助する「社会福祉施設援助金への推薦のお願い」を各教区へ発送するとした。さらに「新潟県中越地震」能登半島地震「新潟県中越沖地震」のチャリティー・コンサートに協賛し、積極的に関わることを確認した。また今回の委員会では、後日「社会委員会通信」に掲載予定である。なお今委員会より欠員補充として福井博文氏(長崎古町教会牧師)が新委員となり委員会に加わった。



多くの課題に積極的に取り組む

「教育基本法改定とキリスト教学校」

社会委員会で講演を聴く

一〇月二日～三日、第35総会期第三回社会委員会が教団会議室にて開催された。

主な報告事項は①「新潟中越沖地震救援募金のお願いの」全国発送と募金状況の件(九月二八日現在、五三六件・二二七、二六、六二二八日現在、四六五件・一

教会)より新潟中越沖地震へ五七五、五〇〇円の支援献金を受領した件、③能登半島地震救援募金で社会委員会扱いの募金総額は九月二八日現在、四六五件・一

サートに協賛し、積極的に関わることを確認した。また今回の委員会では、後日「社会委員会通信」に掲載予定である。なお今委員会より欠員補充として福井博文氏(長崎古町教会牧師)が新委員となり委員会に加わった。

(上地武報)

「会」の機構的位置付け巡り議論 教区活動連帯金配分協議会

二〇〇七年度教区活動連帯金配分協議会が九月二五日(火)午後一時三〇分から教団会議室で開催された。

在の「配分協議会」は第27回教団総会議案の承認を受けて始められた経緯について触れ、教区間互助を基調としこれまでの「平衡資金」の受入れ額を下回らないことを目標として行われたこと、教区間互助の精神を維持するために相互の信頼関係と教区活動の独自性を認め合う両義性が必要であると述べた。

正の上承認した。諸報告承認では、東京教区より過年度分として拠出した金額が報告に含まれていないとの指摘があり、計長担当幹事より訂正の報告がなされた。続いて教区活動連帯金配分検討委員会より出された〇八年度配分額案について協議が行われた。協議では「配分協議会」の位置づけが明確でない中では協議できないとの意見も出されたが、現在の「配分協議会」を設置した教団総会議案自体が大雑把な内容であり、「配分協議会」が年度毎に



様々の課題を覚え、支え合い、祈りあって

その後、高柳竜二神奈川教区議長が発題を行い、現

在の「配分協議会」は第27回教団総会議案の承認を受けて始められた経緯について触れ、教区間互助を基調としこれまでの「平衡資金」の受入れ額を下回らないことを目標として行われたこと、教区間互助の精神を維持するために相互の信頼関係と教区活動の独自性を認め合う両義性が必要であると述べた。

協賛事項に入る前に組織会を行い、議長に野村忠規四国教区議長を選出し、協議に入った。前年度「配分協議会」議事録を若干の訂

(西畑望報)

08 年度負担金総額

今年度に引き続き 1% 減へ 全国財務委員長会議開かる

第35総会期第一回全国財務委員長会議が九月二四～二五日に教団会議室で開催された。

第二日目は鈴木務予算決算委員の司会及び祈祷で始まり、冒頭新任の内藤留幸総幹事が「七月五日の常議員会で竹前総幹事の後任として選任された。教団に事務局、出版局、年金局の三局があり会計は独立しているが、今後は会計監査委員会も指摘しているように、各財務諸表の合算表の作成が課題であり、鋭意努力している。また、世界宣教委

行った。のち高橋豊年金局理事長が、各教区から出された質問や意見に答える形で見解を述べた。質疑応答では出版局の「信徒の友」などの定期刊行物の損益分岐点などに質問が集中した。

②二〇〇六年度事務局の財務報告を、計長祐時財務幹事が決算書に基づき「全て予算内で執行され収支差額を五〇二万円計上することが出来た旨、報告を行った。

③二〇〇八年度予算及び教団負担金については飯塚拓也委員長が予算方針の概要を述べ、昨年度に引き続き負担金総額を一〇減にするなど、資料に基づき詳細な報告を行い各教区の理解

第一日目は①各教区の財務状況②教区における教会・伝道所への負担金賦課基「アンケート結果から」をテーマに報告・質疑があり、各教区の財務状況を共有化し、また各教区の教会への負担金の賦課方法を学びえた事は有意義であった。

は、他に二〇〇八年度教区の負担金算定、全国財務委員長会議の開催であった。

定し、現行計算方式により賦課額案が策定された。教区によって現行陪餐委員の減少数が異なることから、減少割合の少ない教区では、逆に増額となることも見られた。

負担金は〇四年度から年度一〇減を四年間続け、総額で一、一〇〇万円の減額を行ったことになる。従って〇八年度負担金を一〇減の二億六、九八〇万円と設

は、負担金収入一〇減を基にした経常会計の収支総額が二億八、一九〇万円、収益事業会計のそれが二、九七八万円の予算編成となった。

〇八年度予算案について、端緒ともなっており、更なる検討が期待される。教団本部事務局会計は、負担金収入のみによる運営方針を貫くために、圧縮に圧縮を重ねており、限界に近い状況であることが指摘されている。全国財務委員長会議は、同日午後四時三〇分から行われ、沖縄教区を含む全教区が出席した。予算決算委員会が導入を勧めているPCA会計ソフトの実例を粉谷勝巳委員が紹介した。会議後に行われた予算決算委員会の評価会において、会議に出されていた要請を受けて、「諸教区・諸教会の財務等の状況分析」を予決の追加プロジェクトとして設定することとした。

〇〇六年度社会委員会関係献金報告」を全国発送した件、⑧第二回日本基督教団と在日大韓基督教会との宣教協議会報告等である。協議事項では、今期の「全国社会委員長会議」を来年六月十六日～十七日に東京にて開催し、テーマは今日的に社会問題化している家庭崩壊やDV、虐待等に絞っていき、講師との交渉に入るとした。別件では、長期療養中の教師へクリスマスプレゼントを届ける為の「長期療養教師調査」依頼と無認可で法人格を持たない開拓的社会事業へ援助する「社会福祉施設援助金への推薦のお願い」を各教区へ発送するとした。さらに「新潟県中越地震」能登半島地震「新潟県中越沖地震」のチャリティー・コンサートに協賛し、積極的に関わることを確認した。また今回の委員会では、後日「社会委員会通信」に掲載予定である。なお今委員会より欠員補充として福井博文氏(長崎古町教会牧師)が新委員となり委員会に加わった。

サートに協賛し、積極的に関わることを確認した。また今回の委員会では、後日「社会委員会通信」に掲載予定である。なお今委員会より欠員補充として福井博文氏(長崎古町教会牧師)が新委員となり委員会に加わった。

(上地武報)

全教団的取り組みとなるように

第2回「能登半島地震」被災教会会堂等再建支援委員会

第二回「能登半島地震」被災教会会堂等再建支援委員会(以下、委員会という)が、九月十九日～二十日に

被災現地、能登半島・輪島で開催された。

今回の委員会の前後に被災された教会、伝道所及び

関係施設を高橋潤中部教区議長と小宮山剛中部教区能登半島地震被災教会再建委員長(以下、委員長)の案内で問安した。十

九日に七尾教会、七尾幼稚園、輪島教会、二〇日に富来伝道所、羽咋教会、羽咋



土台工事の始まった七尾教会牧師館



輪島で委員会を開催

を行った。

委員会は、はじめに出席

された高橋中部教区議長及

び小宮山中部教区能登半島

地震被災教会再建委員長よ

り、前回の委員会以降の中

部教区の取り組み、経過に

ついての報告を受けた。そ

の中で緊急を要する教会、

関係施設に再建に必要な資

金の一部を既に送金したこ

とが、中部教区扱いの再建

献金会計報告の中で示され

た。

続いて、教団事務局より、

八月からはじめた委員会の

募金状況についての報告を

受けた。

以後、協議に入り、募金、

再建計画等、今後の活動、

運営について話し合った。

募金については、様々な

形態があるようだが、議案

の主旨にあるように、これ

らの支援募金が、この委員

会のもとに結集出来る全教

団的取り組みとなるように

努めていくことを確認し

た。

再建支援については、今

回の問安の状況等をふまえ

て、再建計画の詳細を確認

していくこととする。

次に、今回の問安の状況

所、関係施設の再建計画の

詳細について把握、理解し

ておくことが必要であると

思われるので、委員会とし

て、再建計画の詳細を確認

していくこととする。

次に、今回の問安の状況

所、関係施設の再建計画の

詳細について把握、理解し

ておくことが必要であると

思われるので、委員会とし

て、再建計画の詳細を確認

していくこととする。

次に、今回の問安の状況

所、関係施設の再建計画の

詳細について把握、理解し

ておくことが必要であると

思われるので、委員会とし

て、再建計画の詳細を確認

していくこととする。

工事進捗、募金は今一歩

第4回「新潟県中越地震」被災教会会堂等再建支援委員会

第四回「新潟県中越地震」被災教会会堂等再建支援委員会が九月二日に教団会

議室で開かれた。

(1)事務局報告

①献金累計額(九月十八

日現在)一六四〇五四、二

五三円。このうち、六月二

八日の報告から増えた金額

は、三、四〇六、八四九円。九

四件。

②八月に見附教会へ建築

着手金一四、六〇〇、〇〇〇

円、十日町教会へ牧師館建

築着手金四、七五〇、〇〇〇

円をそれぞれ送金した。

(2)関東教区報告

飯塚拓也関東教区被災支

援センター統括主任から、

中越地震被災教会の再建状

況および「中越沖地震」の

緊急支援について報告をう

け協議した。

①十日町教会 牧師館再建

工事は九月に起工式を行い

年内完成を目標に進められ

ている。

②見附教会 全国的な支援

を受け、新会堂の礎式を行

い、七月末に着手、十一

月末に完成を予定してい

る。教会堂は新しい土地に

おいて、地域の人々にも親

しまれ、利用してもらえ

よう考えている。

③小出教会 先行させてい

た保育園の補修工事も十月

末には完成の見込みとなっ

た。新会堂の再建はその後

となる。

④柏崎センター 関東教区

は今年七月に発生した「中

越沖地震」による被災教会

教会、伝道所の協力を得て

ボランティアセンターを設

置運営してきた。その働き

は設置後八月に閉鎖するま

でに四七日間にわたった。

利用者は奉仕者、スタッフ

をあわせのべ四八〇人の活

動拠点となった。

(津村正敏報)

以上を報告を受け、当委

員会の支援計画を協議決定

した。

中越地震の募金目標額一

億八千万円を達成するため

には、あと千六百万円の募

金が必要。

「能登半島地震」「中越沖

地震」と打ち続く災害が影

響してか、三年前の「中越

地震」募金の伸びが鈍くな

ってきている。会堂等の再

建に伴う支払資金を支援す

るため、全国諸教会からの

募金を支援ニュース、震災

を覚える集会を通じお願い

する。

(樋田利明報)

お知らせ

☆日本基督教団部落解放セ

ンターの開所25周年感謝会

／時11月20日(火) 13時

半～16時半／所日本基督

教団信濃町教会 礼拝堂

本一廣牧師、記念講演Ⅱ遠

藤富寿牧師／主催・問合せ

Ⅱ日本基督教団部落解放セ

ンター運営委員会(807

2-875-8470)

宣教師からの声

天国はどの地からも通じている

林田 義行

(台湾基督長老教会・高雄日本語教会宣教師)

1980年8月、神学生時代の夏期伝道実習で台湾に一ヶ月ほど滞在した。神学校卒業も近くなって台北の日語教会の長老からお誘いを受けたりもしたが、私はまだ手が付けられない地を求めて南部を目指すことにした。1983年8月、産声をあげたばかりの後援会の仲間にもまれながら、刷りたての「高雄通信」創刊号を携えて、真夏の台湾に向け出発した。

台北に到着すると、キリスト教医療伝道会の堀田久子宣教師が出迎えてくださり、郊外の淡水では

が、幸いなことに礼拝は創立以来一度も休むことなく続けられてきた。年に3回ほど、母の日、秋、クリスマスに伝道集会を開く。昨年のクリスマスには、高俊明牧師がお話に来て下さった。例年、幼稚園児と家族を招待して100名ほどが集うため、聖句カレンダーやカードなどを準備する。

『僕んちは教会だった』出版記念
地震被災教会支援
チャリティー・コンサート開催



去る一〇月十二日夜、東京・早稲田奉仕團スコットホールにおいて「陣内大蔵『僕んちは教会だった』出版記念チャリティー・コンサート」(主催)日本キリスト教団出版局/協賛)日本基督教団社会委員会、同関東教会、同中部教会、財団法人早稲田奉仕團)が行われ、観客二三百人を魅了した。(写真)

これはミュージシャンで東京・東美教会伝道師の陣内大蔵さんの自叙伝的エッセイ刊行を記念して企画されたもの。『僕んちは教会だった』(日本キリスト教団出版局刊・一〇五〇円)は牧師家庭に生まれた陣内さんの少年期から思春期の経験を綴ったもので、九〇年代初頭に音楽・文芸雑誌『月刊カドカワ』(角川書店)に連載されたものに加筆・修正され、一冊にまとめられた。山口・宇部緑橋教会を牧会していた陣内厚生牧師の長男として生まれ、牧師家庭ならではの生い立ちを記したエピソード二〇編が、ユーモアを交え痛快に描かれている。また表紙の旧宇部緑橋教会堂をはじめ、文中のイラストも陣内さん自身の手にするもの。当日は「僕は風、君は空」「心の扉」「空よ」などのヒット曲に加え、「アメージング・グレース」が演奏され、最後に陣内さんが特別にアレンジした「真実と清く生きたい」(讃美歌21「五二〇番」を全員で歌った。会場には家族連れなどをはじめ、協賛の教団社会委員会、関東教会、中部教会からの関係者など大勢で賑わった。今回のコンサートの収益は新潟県中越、中越沖、能登半島地震で被災した教会の支援のために献げられ、コンサート終了後は陣内さんの呼びかけでさらに募金も催された。またサイン会も催され、遅くまで多くの人が列をつくり賑わった。教会での伝道・牧会をはじめ、テレビ・ラジオへの出演など音楽活動のかたわら、全国の教会やキリスト教学校で「チャーチコンサート」を開く陣内さん。年内は、これから二〇ステージが予定されている。「歌う伝道師」としての活躍はますます広がっている。

加藤実牧師夫妻(教団宣教師)にもご挨拶することができた。加藤牧師は流暢な中国語をお話しになり、言葉の学びの大切さを実感した。また、PCT総会事務所では高俊明総幹事が不在で、自宅に政治犯をかくまった容疑で投獄中だった。日本からの献金をお届けして、台北からバスで高雄に向かった。

1983年当時、日本基督教団と台湾基督長老教会(以下PCTと略)の宣教協約の改訂が検討されていた。当時の政府は国民党一



吉村美穂姉、チェン加寿子姉とともに
讃美と証しの伝道礼拝で(9月9日)

ともに生きる道の模索だ。日曜日二回の礼拝を行なう。朝の日曜学校は平均して15名ほど、その内4、5名は保護者が含まれる。

日本語教会の礼拝出席は25名前後。礼拝には日本人の外向社員や台湾のお年寄り、帰国留学生などが集う。礼拝の時間は、午後の日差しが強い時間帯で、夏場はスコールになることもある。

九月十二日、安倍首相の突然の辞任で日本中は大混乱。その夕方、ある新聞社からの電話取材で「今回の突然の辞任をどう思いますか」とのこと。私なりに感想を述べた。

その後の確認で、「まことさんの字は旧字…真…でしたね」「ええ」と返事をする。「印字の関係で、新字…真…を使いたい」と言う。私は、新聞記者たる者が、人の名前を正確にではなく、簡単に間合(あわせ)うことに驚いた。さらに聞いてみると、名前に関係しては、他新聞社とも協定ができ

「名は体を表す」の言葉にもあるように、名前は記号ではなく、人格と実体を表すものである。初代教会においては(現在にも通じる)、「イエスの名によって」洗礼が施された。それは、イエスの名が実体と人格を表し、イエスの実在を洗礼式において告白しているからである。「たかが名前、されど名前」どころではなく、大牧者に、名を呼んで頂くためにも、確かな字を使用したい。

(教団総会副議長 小林 眞)

ひととき

神宮 弘さん

いと小さき者の一人に



1929年、石川・金沢生まれ。元県立平和町養護学校校長。馬場幼稚園理事長。白銀教会員。

「いと小さき者の一人に。」この聖句は、神宮さんの四〇年に亘る教員生活を支えてきた御言葉である。

戦後、価値観の大転換に人生の本当の意味を問うた。そんな折、金沢教会を会場に開かれていたYMCAの英語クラスに参加したことをきっかけに教会の門をくぐった。従姉がクリスチヤンであったこと、他にも教会に触れきつかけはあったが、教会の門をくぐったことを意識したのはこの時である。

実家は米穀商、父は家業のほか、能楽師として弟子をとるほどの実力者だった。小さいときから仏教色の強い環境で育ってきた。そのような神宮さんがこの英語クラス、また学んでいた

教師として公立学校一筋で通じた。公立学校での働きを続け、たのは、伝道の困難な地であり多くの人にキリスト者としての証しすることができたからだ。生徒や保護者に向けて、信仰に根ざした教育観、人生観を事あることに伝えてきた。ときには大胆に聖書の言葉を引用しながらでも、中学の英語教師から出発して、後には養護学校校長を務めた。七尾に新設された養護

学校では、生徒が事故によって亡くなる、という大きな危機を経験したが、親の理解を得られたことには深い感謝を覚えた。教員としてはすでに一線を退いている。退職者としての責任は負ってゆくつもりである。しかし、目下、神宮さんの目標は、教会が来年に控えている百周年の記念のことであり、教会が今年度の標語に掲げた「主に對する信仰を告白し、伝道する教会の形成」のために一役員として力を尽くしてゆくことである。加賀の地の伝道。この地に福音の種を蒔いた宣教師たち、信仰の先達の志を継承してゆきたい、と願っている。